四万十町

町内ぶら〜り散策

本堂（ほんどう）

見付から志和方面へ向かう県道325号と仁井田から興津方面へ向かう県道52号の交差点あたりが本堂である。東又地区のメイン交差点である。周辺には、クラインガルテン四万十やB&G海洋センターなどがある。

まずは本堂という地名の由来である。中世の日本では、一つの集落に複数の寺院が存在している地域は珍しかったというが、ここには勝宝寺をはじめとして、幾つかの寺院が存在したという。この地域に寺院の建物＝お堂がたくさんあったことに由来しているという説と、勝宝寺の山号（寺院につける称号）が「本堂山」であったからという説があるようだが、全国の寺院の山号のつけられ方から考えると、「本堂山」という山号自体が、前記の説に由来しているのではないかという推測もできる。

さて、本堂の交差点近くに鍛冶屋さんがある。この鍛冶屋さんは、およそ130年前に、安芸に代々伝わる鍛冶屋「安芸の黒鳥の川島家」からやってきたのだそうだ。そもそも、古代から日本のどこの集落ごとにも鍛冶職人は存在したと言われている。農地を開墾するにあたって、鎌や鍬の類が不可欠であったからである。農具や猟具、漁具、または山林刃物、包丁などを手がける鍛冶屋を「野鍛冶」あるいは「農鍛冶」といった。戦国時代までは、その需要から「刀鍛冶」や「鎧鍛冶」もたくさんいたというが、江戸期に入り、戦がなくなると需要が激減し野鍛冶などに転業した人も多かったという。

ここ本堂にも、安芸の川島家が来るずっと前から多くの鍛冶屋さんが存在していた。基盤整備工事などの際に鍛冶屋跡が確認されている。驚くべきはその数である。聞くところによると、なんと400軒という。400軒の鍛冶屋が存在するためには、それだけの材料が必要である。例えば炭。近辺の山林だけではとてもではないが賄いきれない。外部から交易によって持ち込むしかない。そこで活躍したのが志和の港であった。また、それだけの交易を行うとすれば、それ相応の船舶数が必要となる。とすれば、志和にはかなりの数の船舶があり、つまり、志和氏の勢力は強大なものであったであろうということが推測できるのだと、地区の方からうかがった。また、土佐打刃物発祥の地は土佐山田であるとされているが、実は、ここ本堂ではないかという見方もできるのだという。

現在、本堂には64世帯、149人が暮らしている。

鍬の柄を入れる部分の形状。右が「巻きびつ」といわれる伊予型。左が「抜きびつ」といわれる土佐型。強靭な地盤の土佐では、より頑丈な作りが求められた。

町のうごき

（9月30日）

	人口	前月比
男	8,179	−10
女	9,104	−24
計	17,283	−34
世帯数	8,547	−14

	出生	死亡	転入	転出
男	5	11	5	9
女	1	15	8	18
計	6	26	13	27

（9月中の届出）

窪川地域 12,219人　大正地域 2,417人　十和地域 2,647人

四万十川の水質状況

	適正値(mg/l)	10月4日
リン酸	≦ 1.0	測定範囲以下
硝　酸	≦ 0.5	0.387
アンモニウム	≦ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≦ 1.0	1.2
化学的酸素要求量	≦10.0	測定範囲以下

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部

四万十町通信　2018.11月号　Vol.152（毎月10日発行）
●発行／四万十町企画課　●印刷／窪川印刷
〒786-8501　高知県高岡郡四万十町琴平町16-17　☎（0880）22-3124　FAX（0880）22-3123

UD FONT by MORISAWA　本文など内容の一部に見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。